

受験番号	氏名

※ 答えはすべて解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

問題一 次の文章を読んで後の問いに答えなさい。

ある哲学者が言っていた。もしわたしたちが言葉というものをもたなかったら、ひとはいまじぶんを①オソソっている感情がいったいどういうものか、おそらくは理解できなかったであろう、と。これが意味するところは、言葉が、何かすでにあるものを ②ジョジュツジュツするというより、なにかある、形のさだかでないものに、はじめてかたどりを与えるということだ。言葉にはじめて分かるということがあるということだ。

「分かる」とは、まさに ー である。もやもやしたこと、③バクゼンバクゼンとしてなにか分からないものに含まれているとき、それをいくつかの要素に区分けする。たとえばひとの感情なら、④キドアイラクキドアイラクに分ける。いやそもそも感情じたいが、意志や判断と分けてはじめて、それとして同定できるものである。形なきものに形を与えるということ、そこに言葉のはたらきがある。言葉にすることではじめて存在するようになるものがあるということだ。

いったん区分けすると、こんどはそのはさまやあわいにあるものが見えてくる。陰りやグラブレーションといった濃淡も見えてくる。さらにはその裏で同時にうごめきだしている反対感情も顕在化してくる。（これが注1アンビヴァレンツである）。そのようにして、心にますますこまやかな起伏や襲が、つまりは「あや」（綾・彩）が生まれるのである。言葉が心にかたどりを与えるというのは、そういうことだ。

こうして言葉が心の機微を表すようになる。（a）が、これは言葉が心をじゅうぶんに表現できないというのとじつはおなじことである。ひとつの言葉でそれを表しても、それにおさまりきれないものがかんならずあるからである。言葉はひとつの切り取りであり、別の切り取り方をすれば、別の表情がそこにうまれるからである。

表すもの（言葉）とそれによって表されるもの（このばあいなら心や感情）との関係は、これほど動的であり、錯綜している。あるいは、レヴィーストローズの言葉を借りて、（b）意味するものと意味されるものの関係は、つねに⑤フキンコウフキンコウでありつづけると言ってもよい。

（鷲田清一 〈想像〉のレッスン）

注1 アンビヴァレンツ 同一対象に対して、愛と憎しみなどの相反する感情を同時に抱くこと。また、その両者の間での感情の揺れ動き。

問一 文中の、傍線①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 文中の ー に入る語を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 正反対 イ とても奇妙 ウ 言い得て妙 エ かなり微妙

問三 傍線（a）とありますが、それは何故だと言っていますか。その理由を述べている部分を抜き出し、はじめと終わりの7文字を答えなさい。（句読点は含まない）

問四 傍線（b）の 二 意味するもの、三 意味されるもの とは何のことですか。それぞれ5文字以内の文中の言葉を抜き出して答えなさい。
（裏面に続く）

問五

この文章には「言葉の□□」という小題が付いています。空欄□に入る語として最適なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 偉大さ イ 美しさ ウ 悪徳 エ こまやかさ オ ちぐはぐ カ 恐ろしさ

問題二 川端康成氏の、日本人初のノーベル文学賞受賞の記念講演の演説「美しい日本の私」からの次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

A 春は花夏ほととぎす秋は月

冬雪さえて涼しかりけり

この道元の歌も四季の美の歌で、古来の日本人が春、夏、秋、冬に第一に①愛でる自然の景物の代表をただ四つ②無造作にならべただけの、月並み、常套、平凡、この上ないと思へば思へ、(a)歌になつてゐない歌と言へば言へます。しかし別の古人の似た歌の一つ、僧良寛(一七五八年—一八三一年)の辞世、

B 形見とて何か残さん春は花

山ほととぎす秋はもみぢ葉

これも道元の歌と同じやうに、ありきたりの事柄とありふれた言葉を、ためらいもなく、と言ふよりも、ことさらもとめて、連ねて重ねるうちに、日本の真髓を伝へたのであります。まして、良寛の歌は辞世です。

(中略)

草の③庵に住み、粗衣をまとひ、野道をさまよひ歩いては、子供と遊び、農夫と語り、信教と文学との深さを、むずかしい話にはしないで、「和顔愛語」の④無垢な言行とし、しかも、詩歌と書風と共に、江戸後期、一八世紀の終りから一九世紀の始め、日本の近世の俗習を⑤超脱、古代の高雅に通達して、現代の日本でもその書と詩歌を貴ばれている良寛、その人の辞世が、(b)自分は形見に残すものはなにも持たぬし、なにも残せるとは思はぬが、自分の死後も自然はなほ美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になつてくれるだらう、といふ歌であつたのです。日本古来の心情がこもつてゐるとともに、良寛の宗教の心も聞える歌です。

問一 文中の、①～⑤の漢字の読み方をひらがなで書きなさい。

問二 傍線(a)とありますが、Aの歌が、「歌になつてゐない」という理由を、「くだから」に続く形で、文中より、50字以内で抜き出し、はじめと終わりの5文字を答えなさい。

問三 傍線(b)は、Bの歌のどの部分を訳したものですか。その部分を抜き出して答えなさい。

問四 次の文章の空欄㊦・㊧に、文中より10文字以内の適語を抜き出して入れなさい。

川端氏はこの文章の中で、Bの良寛の歌は、Aの道元の歌と似ているが、それと違って、

㊦と評価しています。歌の中に、良寛の宗教の心も聞こえる、と言っているのは、この歌が良寛の㊧の歌であるからと言えるでしょう。